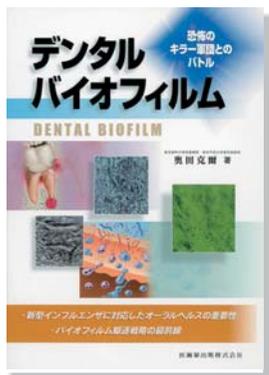




奥田克爾 著

デンタルバイオフィルム 恐怖のキラ軍団とのバトル

藤橋歯科医院（栃木県宇都宮市）／安生朝子



A4判/260頁
定価 7,350円
(本体 7,000円+税 5%)
医歯薬出版刊
(2010年1月発行)

歯科衛生士のおもな仕事は、デンタルプラーク細菌であるバイオフィルムとの“バトル”であるといえます。そのバイオフィルム細菌との戦いの核心を捉えたのが、本書です。

私は、いままで奥田先生の著書『デンタルプラーク細菌の世界』や『口腔内バイオフィルム デンタルプラーク細菌との戦い』（すべて医歯薬出版刊）を読んで、“目から鱗が落ちた”と感じることが少なくありませんでした。その後、奥田先生とともに全国各地で歯科衛生士を対象に講演をする機会に恵まれ、デンタルプラークとの戦いにおいては、マンパワーを必要とする機械的なバイオフィルム除去を凌駕する手段はないこと、音波歯ブラシ使用の意義などを話させていただきました。

本書には、齲蝕・歯周病予防においては、PMTCを含むプラークコントロールがいかに有効であるかがわかりやすく書かれています。また、“医学の父”と称されたヒポクラテスが紀元前にスクレーラーを使って歯周治療を行っていたという歴史的な背景にも言及しながら、SRPなどの歯科衛生士業務の重要性を明解に示しています。

バイオフィルム集団となって棲みつクデン

タルプラーク細菌は、500種類を超えます。本書では、それらの多種の細菌は、種類を超えてコミュニケーションをとって、ヌルヌルとしたバイオフィルムとなり、病原性すら調節でき、一筋縄では排除できない集団となることが書かれています。また、デンタルバイオフィルムは、抗菌薬などに抵抗性があることから、PMTCやSRPなどの必要性を理解することができます。さらに、齲蝕・歯周病は生活習慣が密接にかかわり、複数細菌種が原因となる「デンタルバイオフィルム感染症」であること、スクロースの不規則な摂取や喫煙などのリスクについても解説されています。つまり、本書には、患者さんにセルフケアの意義を説明する際に役立つ知識も多数盛り込まれているのです。

著者は微生物学の研究者ですが、スウェーデンのカロリンスカ大学でカリオロジーを学び、米国のニューヨーク州立大学バッファロー校の歯周病研究センターで研究されたことなどから、つねにその視点は臨床現場にあります。その背景には、多くの臨床系大学院生や歯科衛生士を支援してきた軌跡があり、歯科衛生士とともに、口腔ケアの意義を歯科だけでなく医科の国際誌にも発表しています。

歯科衛生士教育が3年制以上となったいま、歯科衛生士の仲間が、ICU（集中治療室）やCCU（冠状動脈疾患管理室）でも活躍する時代となっています。その背景やより高度なデンタルバイオフィルムとの戦いについても解説されている本書は、歯科衛生士として働く誇りを感じることができる書籍といえるでしょう。